



RIETI Discussion Paper Series 15-J-018

子育ての方法と労働市場の評価—日本における実証研究—

西村 和雄
経済産業研究所

八木 匡
同志社大学



Research Institute of Economy, Trade & Industry, IAA

独立行政法人経済産業研究所
<http://www.rieti.go.jp/jp/>

子育ての方法と労働市場の評価－日本における実証研究－

西村和雄（神戸大学／経済産業研究所）*
八木匡（同志社大学）**

要 旨

Chua (2011)は、中国に多いと言われる子育てと西洋に多いと言われる子育て方法の比較をすることで、厳格な子育ては子供の成功に役立つとして問題提起した。親の子育てのあり方が子供のパフォーマンスに与える影響に関する研究は、Kim (2013)が実証的に"Tiger Mother"と呼ばれる親による子育ての優位性を否定したことによって、更に注目を集めることとなった。

本稿の研究では、上記の研究で提示された問題に関連して、日本のデータを用い、子育ての方法が子どもの将来に与える影響について、就業後の所得を代理変数として分析を進める。

我々は、子供時代の親との関係に関する16項目の質問の回答の主因子分析を行い、「関心」「共感」「自立」の3つを因子として抽出した。その上で、自立教育の程度、愛情認知の程度、関心の程度をもとにして、子育ての方法を、支援型、厳格型（タイガー）、迎合型、放任型、虐待型に分類し、それぞれの子育てを受けたグループの平均所得を比較することによって、子育てのあり方が、労働市場での評価にどのような影響を与えるかを明らかにする。

キーワード：子育て、支援型、厳格型、タイガー・マザー、所得比較
JEL Classification Codes：I21, I26

RIETIディスカッション・ペーパーは、専門論文の形式でまとめられた研究成果を公開し、活発な議論を喚起することを目的としています。論文に述べられている見解は執筆者個人の責任で発表するものであり、所属する組織及び（独）経済産業研究所としての見解を示すものではありません。

本稿は、独立行政法人経済産業研究所におけるプロジェクト「日本経済社会の活力回復のための基礎的研究」（代表：西村和雄ファカルティフェロー）の成果の一部である

* 神戸大学経済経営研究所教授

** 同志社大学経済学部教授

1. 序論

信頼形成が経済活動の効率性を高めるという議論が、ザック (2013)をはじめとして、近年様々な問題に対して行われている。西村他(2014)では、モラルが高い労働者が労働市場において高い評価を受けていることを日本のデータによって示し、規範意識の形成が企業内での信頼関係を高め、生産性を高めていることの傍証を示した。

子供の規範意識の形成は親の子育てのあり方とも関係する。Chua (2011)は厳格な子育ては子供の成功に役立つとして、中国に多いと言われる子育てと西洋に多いと言われる子育て方法の比較をすることで問題提起をした。厳格な子育てをする母親はChuaによって"Tiger Mother"と呼ばれる。

親の子育てのタイプが子供のパフォーマンスに与える影響に関する研究は、Kim (2013)が実証的に"Tiger Mother"と呼ばれる親による子育ての優位性を否定したことによって、更に注目を集めることとなった。Kimは、親のもつ特質として、温かみ (warmth) , 論理的 (reasoning) , 観察的 (monitor) , 民主的 (democracy) の4つと、対立的 (hostility) , 支配的 (control) , 恥辱的 (shaming) , 懲罰的(punitive)の4つの、合計8つを選んで、444の中国系アメリカ人家庭の調査をした。positiveな影響を与えると思われる最初の4つのグループをP、negativeな影響を与える後半の4つをNと称することにすると、Pの特質が高くNの特質が低い親を支援型 (Supportive) , PとNのどちらの特質も高い親を厳格型 (Tiger) 、PとNのどちらの特質も低い親を放任型 (Easygoing) , Pの特質が低くNの特質が高い親を虐待型 (Harsh) と呼んだ。こどもの学業成績、精神的な安定の面で、最も効果があったのは、支援型の子育てであった。その次が放任型、そして厳格型、もっとも効果がなかったのは虐待型の子育てであった。本稿では、Kimとは異なった方法によって、日本のデータを用いて、子育てのタイプと子育ての成果との関係を分析していく。

なお、Chua (2011)およびKim (2013)の研究に先行して、子どもの育て方に関して、多くの研究蓄積が存在している。ここでは、本研究に関連した研究に焦点を絞り、子育てに関する研究の流れを簡単に整理する。Ge et al. (1996)は、どのような子育てが子どもの鬱症を引き起こしやすいかを分析し、親子間での信頼の崩壊が重要な要因であることを指摘した。Barber (1996)も、子どもに鬱症を生じさせる子育ての特徴を分析し、子どもに対する心理的制限と行動的制限が、鬱症および非行の重要な要因となることを明らかにした。Fuligni and Source (1999)は、家庭環境の異なったアメリカ人高校生を対象に、家族の一員である責任をどのような態度で果たしているかを調査し、家族との前向きな関係が構築できれば、学習効果も高いことを示した。

本稿の研究では、上記の研究で提示された問題に関連して、日本のデータを用いて、調査する。日本の伝統的子育てについては、明治時代初期の、外国人訪問者による著作の中で、地域全体で子供に愛情をかける様子が記述され、日本では他の国よりも子ども崇拝が一般的であり、子供が親切に取扱われ、そして子供の為に深い注意が払われる国は他にないことが述べられている (イザベラ バード(1880)、エドワード・S・モース (1885) 、クルト・ネットー、ワーグナー (1901) 参照)。

江戸時代には、一種の倫理学である「石門心学」と呼ばれる学派に属する手島堵庵(1775)、脇坂義堂 (1803)が子供を厳しく育てることを戒め、誉めて育てることを推奨した。一方で、貝原益軒 (1710) は子供には小さなときから物事を教え、また、厳しく育てることを推奨している。相反する子育ての見解があるということは、厳しい育て方をする親も、子どもを甘やかす親もいたのであろう。しかし、明治時代の外国人による記述から想像すると、江戸時代には、どちらかと言えば、子どもを溺愛することの弊害の方が大きかったのではないだろうか。

それでは、現代の日本で支配的な子育てはどのようなものであろうか。我々は、子育ての方法が子どものパフォーマンスに与える影響について、就業後の所得を成果の代理変数としてみなして分析を行った。

以下の第2章で、データと調査の概要を説明する。第3章では、16項目の質問で、子供時代の親との関係をたずね、それに対する回答の主因子分析を行い、「共感」、「関心」、「自立」の3つの因子抽出を行った。親から子どもへの信頼は自立の子育てをどの程度行っているかに反映されていると考えることができ、子どもから親への信頼は子供が抱く親の愛情に対する認知程度によって反映されていると考えられる。また、子供が親から無視されているといった感情を抱いている場合は、親子間の信頼形成が小さいことを表していると考えられる。第4章では自立教育の程度、愛情認知の程度、関心の程度をもとにして、子育てのタイプを、支援型、厳格型（タイガー）、迎合型、放任型、虐待型に分類して、それぞれの子育てが、子供の所得によって反映される労働市場での評価にどのような影響を与えるかを明らかにする。

2. 調査概要

本調査は、2014年秋にインターネット調査によって実施された。なお、本調査はプレ調査によって子供のいる既婚者のみに標本を限定し本調査を実施している。また、本分析では就業者のみを対象とした分析を行っており、以下では就業者データの性質を示す主要変数について度数分布表を示す。

表1 性別

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 男性	3096	63.0	63.0	63.0
女性	1820	37.0	37.0	100.0
合計	4916	100.0	100.0	

表2 年齢階級

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 20代	90	1.8	1.8	1.8

30代	791	16.1	16.1	17.9
40代	1772	36.0	36.0	54.0
50代	1550	31.5	31.5	85.5
60代以上	713	14.5	14.5	100.0
合計	4916	100.0	100.0	

表3 最終学歴

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 中学校	43	.9	.9	.9
高校	1171	23.8	23.8	24.7
専門学校	477	9.7	9.7	34.4
短大・高専	640	13.0	13.0	47.4
大学	2298	46.7	46.7	94.2
大学院	287	5.8	5.8	100.0
合計	4916	100.0	100.0	

表4 理系または文系

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 理系	1036	21.1	40.1	40.1
文系	1505	30.6	58.2	98.3
文理融合	44	.9	1.7	100.0
合計	2585	52.6	100.0	
欠損値 システム欠損値	2331	47.4		
合計	4916	100.0		

表5 昨年1年間の年収（税込み労働所得：単位万円）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 1-200	1488	30.3	30.3	30.3
200-399	891	18.1	18.1	48.4
400-599	1003	20.4	20.4	68.8
600-799	772	15.7	15.7	84.5
800-999	427	8.7	8.7	93.2
1000-1199	163	3.3	3.3	96.5
1200-1399	65	1.3	1.3	97.8
1400-1599	39	.8	.8	98.6

1600-1799	16	.3	.3	98.9
1800-1999	18	.4	.4	99.3
2000-	34	.7	.7	100.0
合計	4916	100.0	100.0	

表6 父親学歴

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 中学校	1309	26.6	28.8	28.8
高校	1796	36.5	39.5	68.3
専門学校	133	2.7	2.9	71.2
短大・高専	116	2.4	2.6	73.8
大学	1144	23.3	25.2	98.9
大学院	48	1.0	1.1	100.0
合計	4546	92.5	100.0	
欠損値 わからない	370	7.5		
合計	4916	100.0		

表7 母親学歴

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 中学校	1248	25.4	27.4	27.4
高校	2288	46.5	50.3	77.7
専門学校	261	5.3	5.7	83.4
短大・高専	435	8.8	9.6	93.0
大学	312	6.3	6.9	99.8
大学院	7	.1	.2	100.0
合計	4551	92.6	100.0	
欠損値 わからない	365	7.4		
合計	4916	100.0		

表8 現在の就業形態

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 正規従業員	1371	27.9	51.9	51.9
非正規従業員	899	18.3	34.0	85.9
自営業起業	254	5.2	9.6	95.5
家業引き継ぎ	88	1.8	3.3	98.8

その他	32	.7	1.2	100.0
合計	2644	53.8	100.0	
欠損値 システム欠損値	2272	46.2		
合計	4916	100.0		

表9 現在の職種

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効数 生産・技能職	251	5.1	9.5	9.5
事務職	606	12.3	22.9	32.4
管理職	254	5.2	9.6	42.0
技術・研究開発職	287	5.8	10.9	52.9
営業職	263	5.3	9.9	62.8
専門職	328	6.7	12.4	75.2
経営者	176	3.6	6.7	81.9
その他	479	9.7	18.1	100.0
合計	2644	53.8	100.0	
欠損値 システム欠損値	2272	46.2		
合計	4916	100.0		

3. 親から受けた子育て経験

3.1 親の子育てに対する評価と所得

本調査では、表10で示されている16項目の質問で子供時代の親との関係をたずね、それに対する回答の主因子分析を行い、因子抽出を行った。質問項目については、Armsden and Greenberg (1987)の研究を基礎に作成した。本調査では、各質問項目に対して、5段階のリッカートスケールで回答していただき、「まったくそう思わない」に1の点数を与え、「とてもそう思う」に5の点数を与えている。主因子分析では、固有値が1以上となる主因子を抽出しており、抽出された3つの主因子と強い相関を持つ質問項目を見ることにより、主因子の意味を解釈した。以下では第1主因子を「共感」、第2主因子を「関心」、第3主因子を「自立」と解釈した。表9では主因子分析の結果を示している。共感とは親が子供を信頼し愛情をもつ度合である。関心とは親が子供の状況を把握し、理解している度合、自立は子供がどれだけ自分自身で判断を下していたかの度合である。

表10 EQUAMAX回転後因子行列

質問項目	共感経験	関心経験	自立経験
両親は私の意見を尊重してくれた	.477	.357	.424
私は解決すべき問題があるとき、自分自身で解決しようとした	-.087	-.107	.435
私は心配事があれば、それに対する両親の	.675	.157	-.100

見解を得たいと思った			
両親は私が何か失敗したとき、察知した	.681	.153	.010
私の問題を両親と話すことによって、私は恥ずかしい、もしくは愚かであると感じた	.210	-.420	.024
両親は私に多くの期待をしていた	.362	-.063	.102
私は家で精神的に不安定になりやすかった	-.009	-.701	-.244
両親が彼ら自身の問題を抱えているとき、私は両親の問題にかかわろうとしなかった	-.039	-.451	.068
家庭内で私に関心がないと感じた	-.176	-.691	-.220
誰を頼りにしたら良いか私にはわからなかった	-.085	-.622	.018
私は両親を信頼していた	.567	.446	.353
両親は私の様々な過去の経験について理解していなかった	-.211	-.690	-.020
だれも私のこと理解していないと感じていた	-.160	-.789	-.172
もし両親が何かが私を困らせると知ったなら、それについて私に尋ねた	.472	.053	.066
仕事、進学先などの選択には両親の助言に従った	.420	-.146	-.211
両親は私を信頼していた	.501	.407	.481

次に、子供時代の親との関係を表す3つの主因子（関心経験、共感経験、自立経験）のそれぞれについて四分位範囲を求め、カテゴリ変数に変換した。カテゴリ化における第1四分位点Q1および第3四分位点Q3は、共感経験ではQ1:-0.477およびQ3: 0.583、関心経験ではQ1: -0.63およびQ3: 0.493、自立経験ではQ1:-0.505およびQ3: 0.475となっている。

図1では、共感経験程度別平均所得を示しており、表11ではカテゴリ間での所得平均に関する差の検定における有意確率を示している。この結果から示されるように、親からの共感を感じなかった者の平均所得は有意に低くなっていることが示されている。

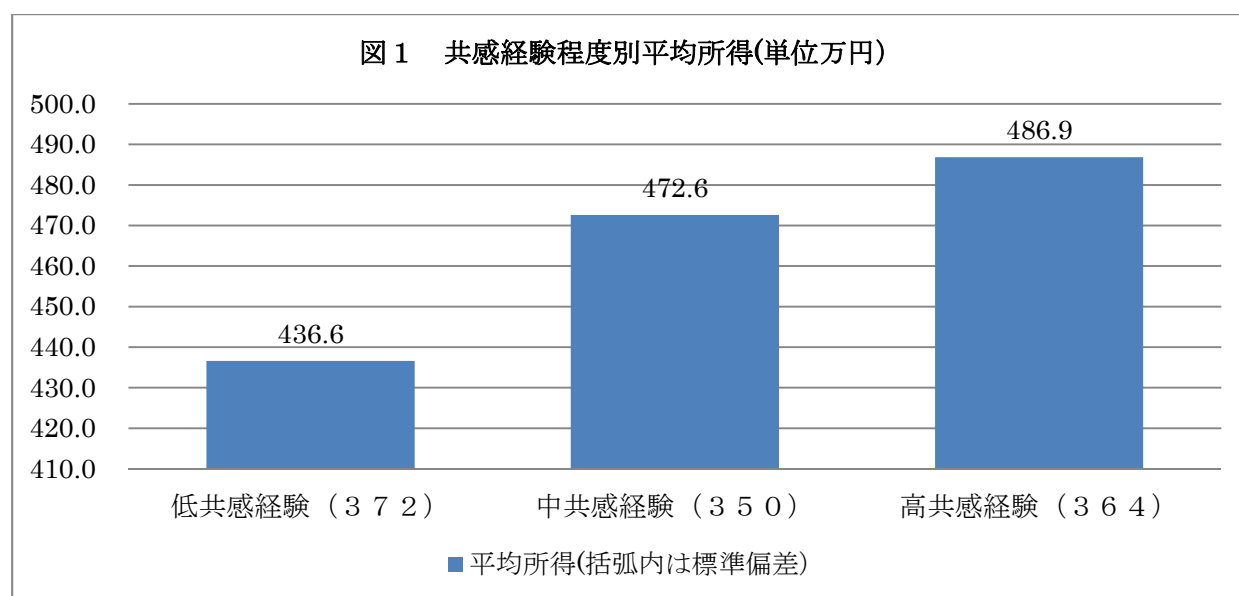


表11 共感カテゴリ間での所得平均に関する差の検定

基準カテゴリ	比較カテゴリ	平均値の差(単位万円)	標準誤差	有意確率
低共感経験	中共感経験	-36.0*	12.8	.015
	高共感経験	-50.3*	15.3	.003
中共感経験	低共感経験	36.0*	12.8	.015
	高共感経験	-14.3	13.0	.614
高共感経験	低共感経験	50.3*	15.3	.003
	中共感経験	14.3	13.0	.614

なお、この対象は男女をあわせたものであるが、対象を男性に限ると、低共感601.8万円、中共感607.2万円、高共感654.0万円であり、高共感との差については中共感、低共感ともに統計的に有意であった。

図2および表12からは、親からの関心を感じた程度が減少することによって、所得が統計的に有意に減少していることが示されている。

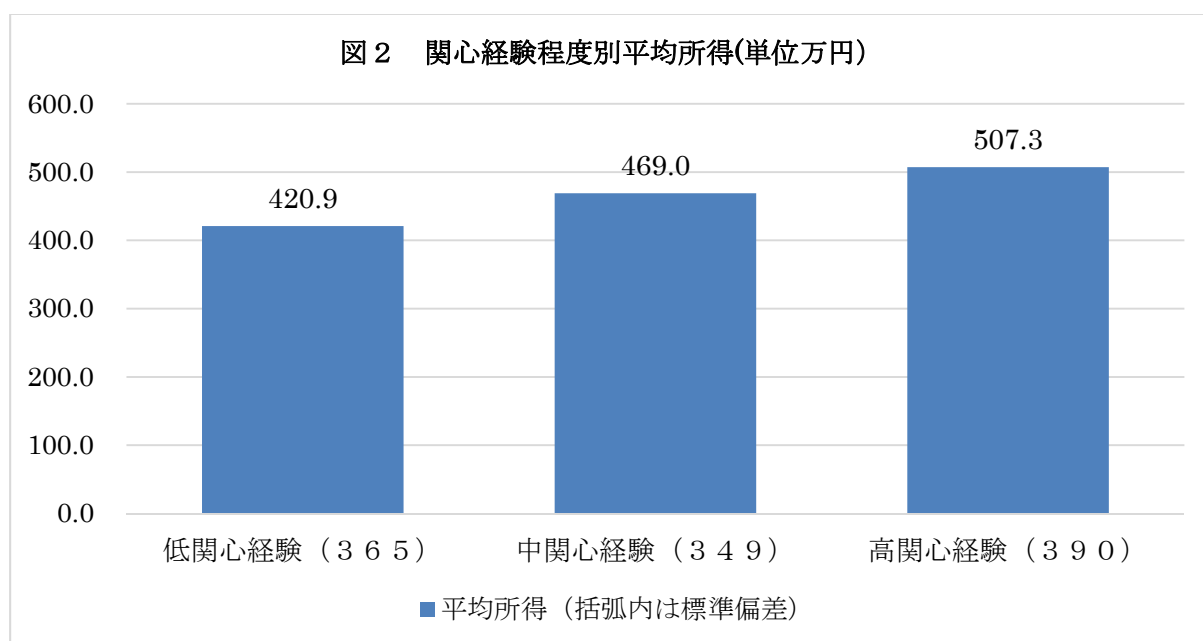


表12 関心カテゴリ間での所得平均に関する差の検定

基準カテゴリ	比較カテゴリ	平均値の差(単位万円)	標準誤差	有意確率
低関心経験	高関心経験	-86.4*	15.4	.000
	中関心経験	-48.1*	12.8	.001
中関心経験	高関心経験	-38.2*	13.1	.010
	低関心経験	48.1*	12.8	.001
高関心経験	中関心経験	38.2*	13.1	.010
	低関心経験	86.4*	15.4	.000

この対象は男女をあわせたものであるが、対象を男性に限る場合には、低関心624.6万円、中関心592.3万円、高関心662.0万円であり、高共感と中共感との差のみ統計的に有意である。

図3および表13からは、自立経験が少ない者は、統計的に有意に所得が少ないことが示されている。

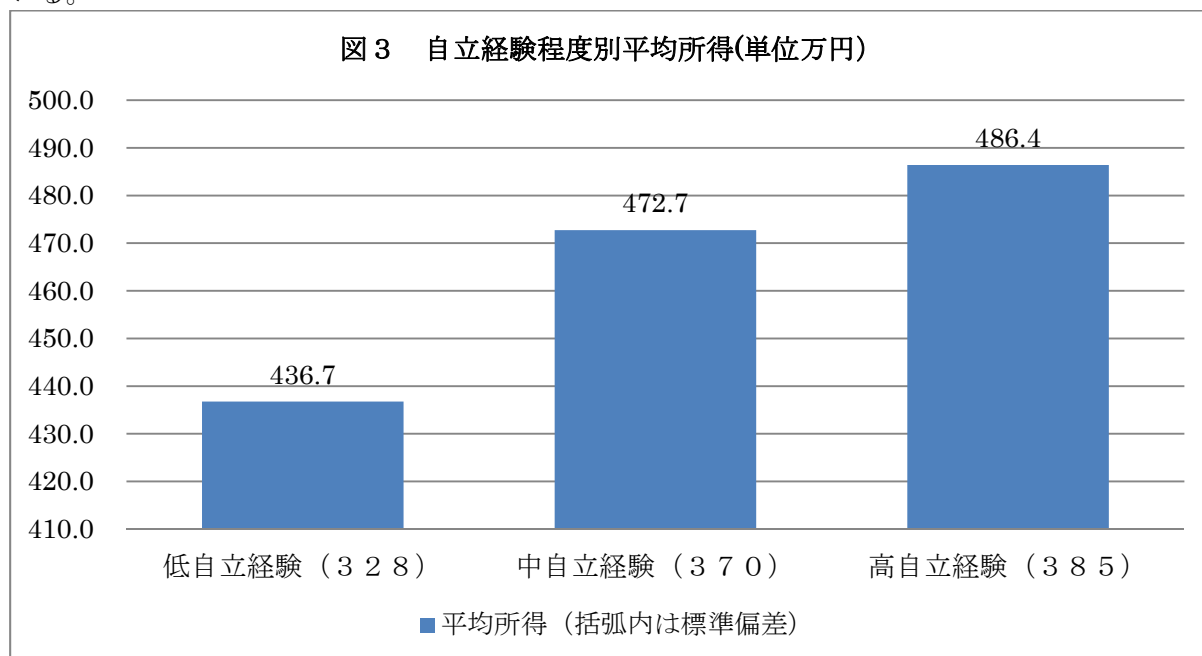


表13自立カテゴリー間での所得平均に関する差の検定

基準カテゴリー	比較カテゴリー	平均値の差 (単位万円)	標準誤差	有意確率
低自立経験	中自立経験	-36.0*	12.0	.008
	高自立経験	-49.6*	14.4	.002
中自立経験	低自立経験	36.0*	12.0	.008
	高自立経験	-13.7	13.2	.658
高自立経験	低自立経験	49.6*	14.4	.002
	中自立教育経験	13.7	13.2	.658

この対象は男女をあわせたものであるが、対象を男性に限っても、低自立経験が575.8万円、中自立経験が615.9万円、高自立経験が658.4万円となり、すべてのカテゴリー間での差は統計的に有意である。

また、女性のみを対象とした場合には、共感については、中共感、低共感ともに、高共感との差が統計的に有意であったが、関心と自立のそれぞれについては、高い女性の所得と、中くらいや低い女性の所得との平均値の差は有意ではなかった。

3.2 躰の厳しさ別平均所得比較

次に、我々は、子ども時代に親に叱られた経験が「よくある、少しある、あまりない、全くない」のどれにあたるかを尋ねた。

図4では、親から厳しく叱られた経験の程度別平均所得の違いを示している。図から示されるように、親から厳しく叱られた経験が無いものが、有意に平均所得が低くなっていることがしめされている。親に叱られた経験が「よくある」、「少しある」、「あまりない」の間では、有意な所得の差はない。

しかし、注意すべき点は、厳しく叱られた経験のあるものの所得が、最も大きな標準偏差を与えられており、所得が大きく散らばっていることである。厳しく叱ることは、教育効果がある場合と、無い場合の差が大きいことを示している。この結果は、かなり注意を要することが図5から図7を調べることによって明確となる。

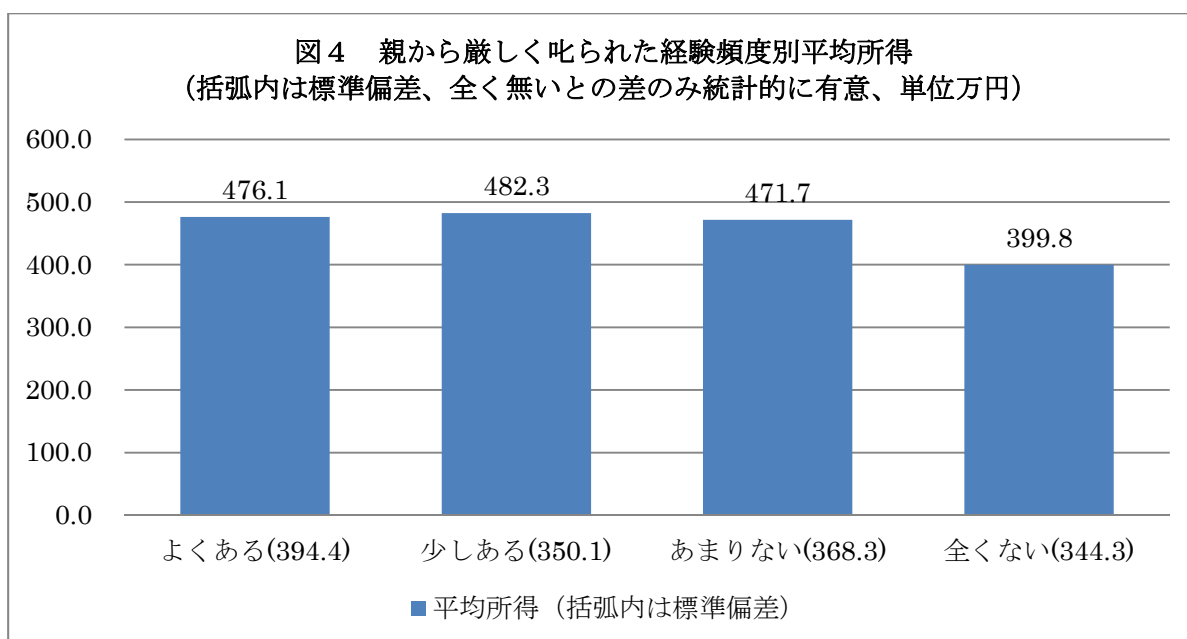


図5は、親から厳しく叱られた経験の程度別平均所得が、共感経験の強さによってどのように異なるかを示したものである。共感を強く感じるほど、厳しく叱られた経験が能力形成を高めている。最も平均所得が低いのが、共感経験が少なく、厳しく叱られた経験も持っていない者 (371.6万円) である。最も平均所得が高いのが、共感経験が高く、厳しく叱られた経験が多い者 (547.7万円) である。

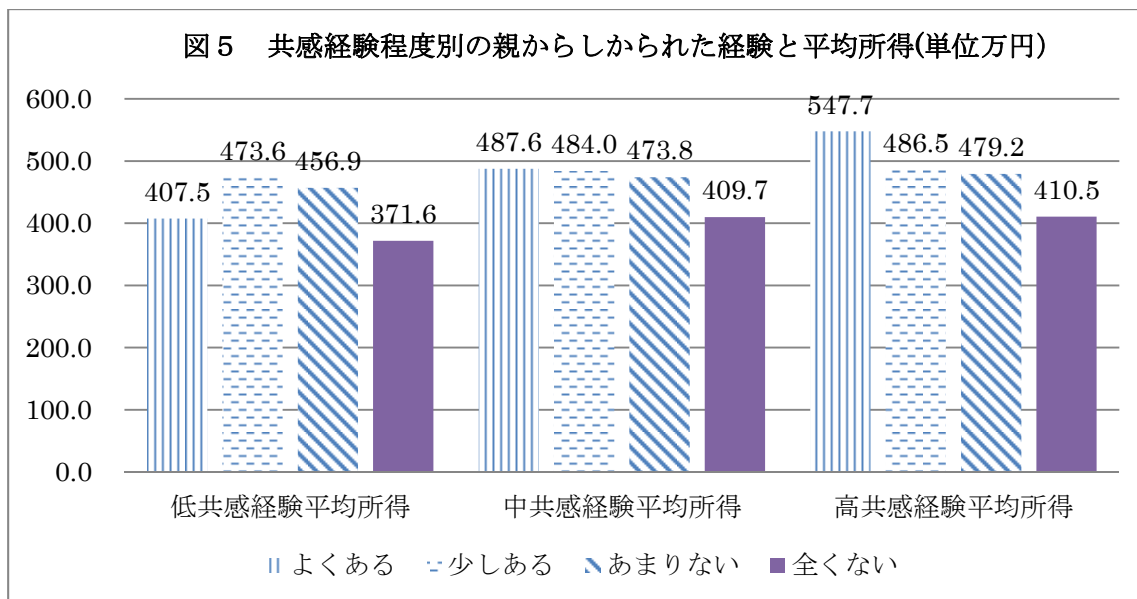


図6では、親から厳しく叱られた経験の程度別平均所得が、関心経験の強さによってどのように異なるかを示したものである。関心経験が高いほど、厳しく叱られた経験が能力形成を高めている。最も平均所得が低いのが、関心経験が低く、厳しく叱られた経験も持っていない者（358.1万円）である。最も平均所得が高いのが、関心経験が高く、厳しく叱られた経験が多い者（592.5万円）である。

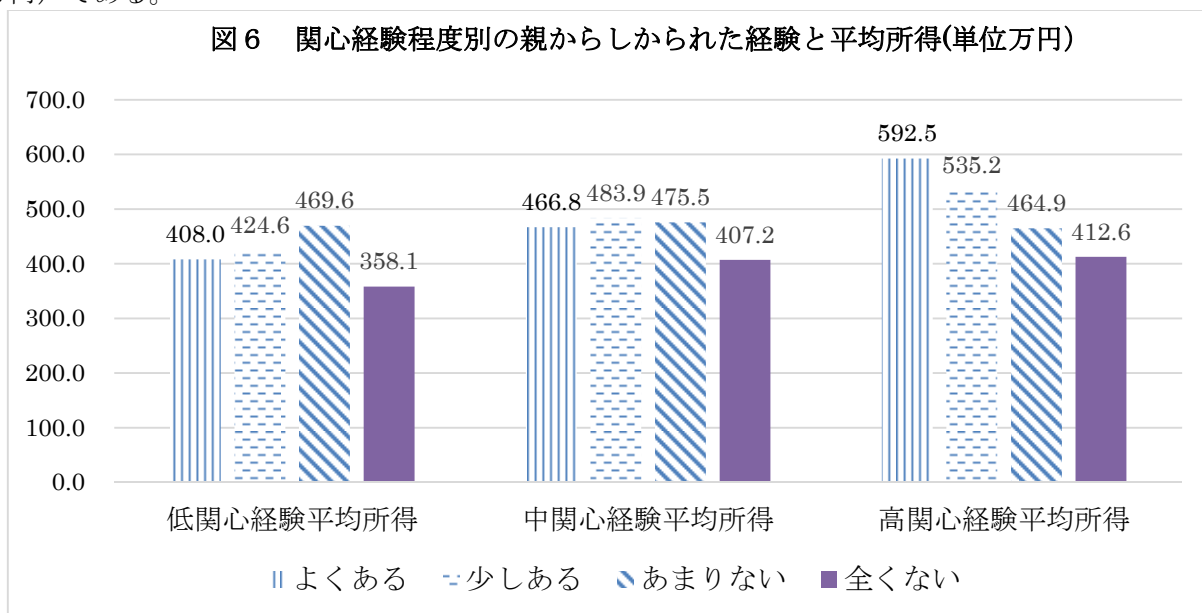
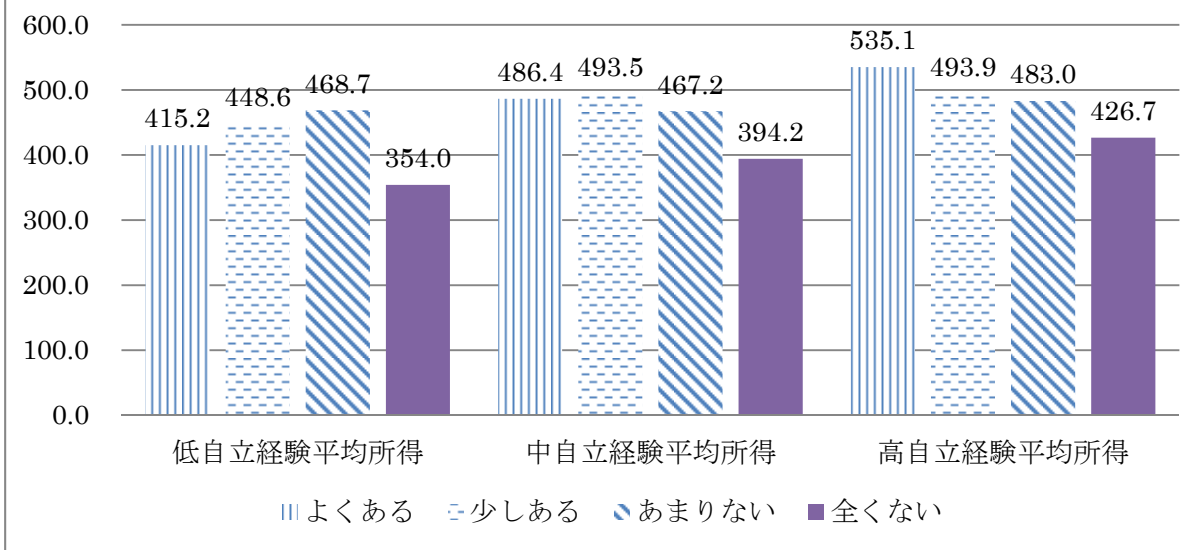


図7では、親から厳しく叱られた経験の程度別平均所得が、自立経験の強さによってどのように異なるかを示したものである。自立経験を強く感じるほど、厳しく叱られた経験が能力形成を高めている。最も平均所得が低いのが、自立経験が少なく、厳しく叱られた経験も持っていない者（354.0万円）ある。最も平均所得が高いのが、自立経験が高く、厳しく叱られた経験が多い者（535.1万円）である。

図7 自立経験程度別の親からしかられた経験と平均所得(単位万円)



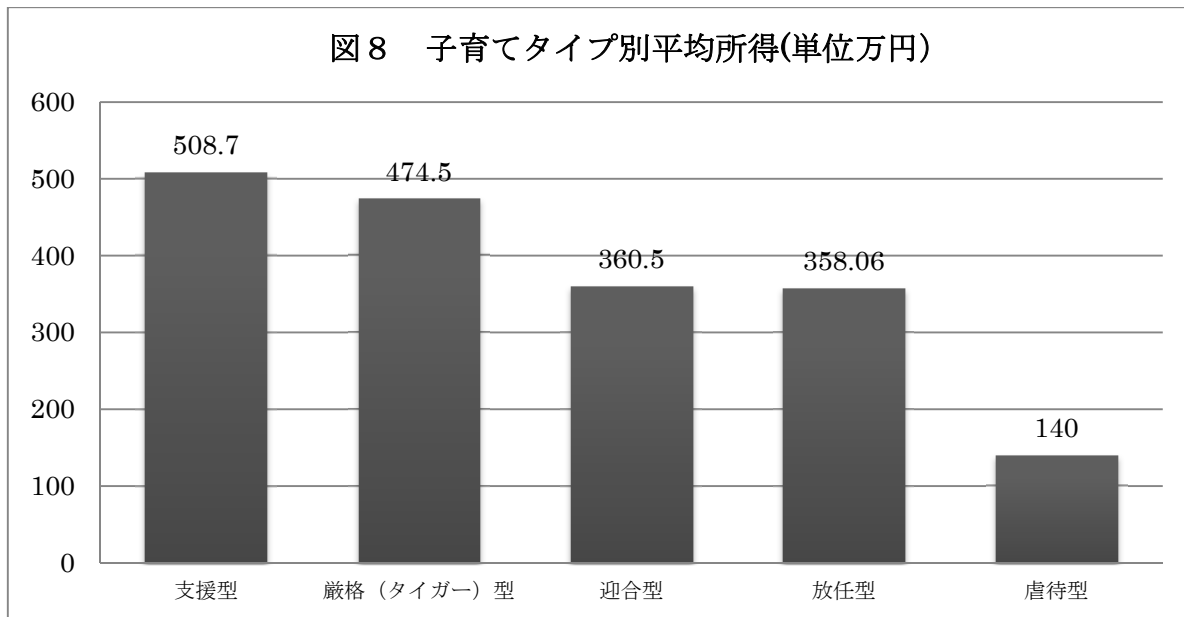
子供から親への信頼は共感経験によって生み出され、親から子供への信頼は自立教育を繰り返すことによって醸成される。関心経験がなければ、親から子、子から親への信頼が醸成されない。本研究結果は、厳しい子育てが教育効果を持つのは、親子間での信頼形成が存在している場合であり、信頼形成が行われていない状態で、厳しい教育を行っても子育ての成果が期待できないことを示唆し、Ogaki (2012)等が議論してきたTough Love modelが成立する条件を実証的に示していると解釈できる。

4.子育てのタイプ別所得分布

子ども時代に親に叱られた経験が「よくある、少しある、あまりない、全くない」という回答を、子どもに対する親の態度が「厳しい、やや厳しい、あまり厳しくない、全く厳しくない」と解釈して、我々は以下のように子育てのタイプを定義した

- 1) 支援型：高自立、中・高共感、厳しい・やや厳しい、中・高関心
- 2) 厳格型（タイガー）：、低自立、中・高共感、厳しい・やや厳しい、中・高関心
- 3) 迎合型：低自立と中自立、高共感、全く厳しくない
- 4) 放任型：低関心、全く厳しくない
- 5) 虐待型：低関心、低自立、低共感、厳しい

それぞれの子育てのタイプ別平均所得を図8で示す。図から示されるように、支援型が最も高い平均所得で、次に厳格型である。放任型と迎合型はほぼ同じ平均所得となっている。虐待型は、少数であるが、平均所得は大きく下がる。



注：タイプ間での平均値の差の検定におけるp値は、次の通りである。支援型と厳格型0.166、厳格型と迎合型0.000、迎合型と放任型0.4801、放任型と虐待型0.000である。従って、支援型および厳格型と迎合型の間では、平均所得の差が統計的に有意であり、虐待型は他のタイプとの比較においてすべて平均所得の差は統計的に有意であると判断できる。

なお、データを男性に限定して分析すると、支援型662.0万円、迎合型620.0万円、放任型608.3万円、厳格型595.1万円、虐待型200.0万円で、支援型が最も高い点は変わらず、厳格型の所得が迎合型や放任型よりも低くなる。

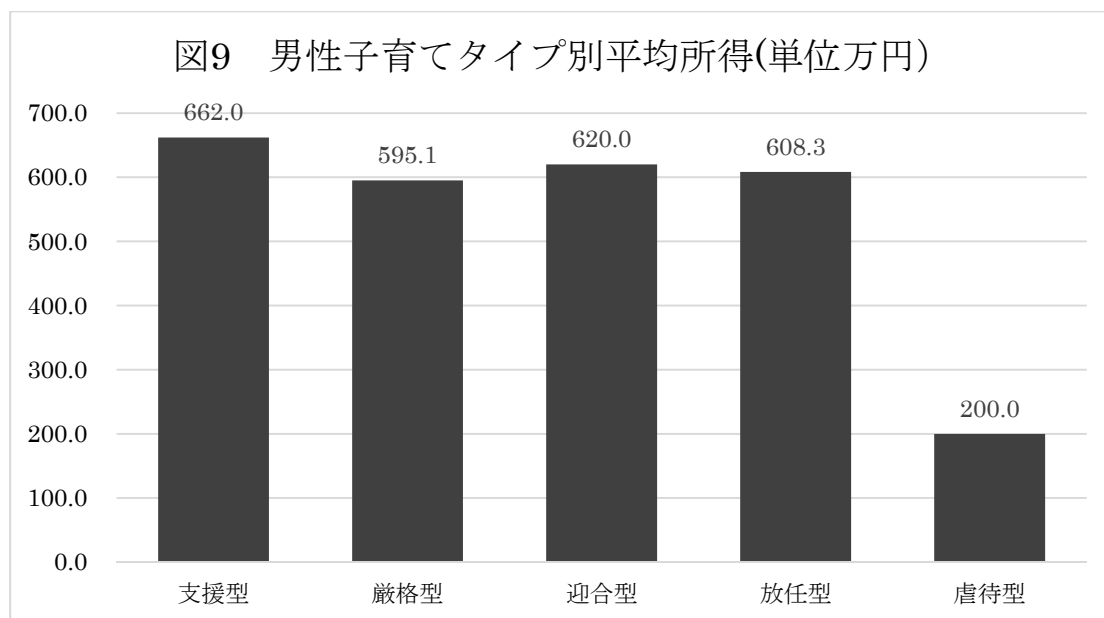


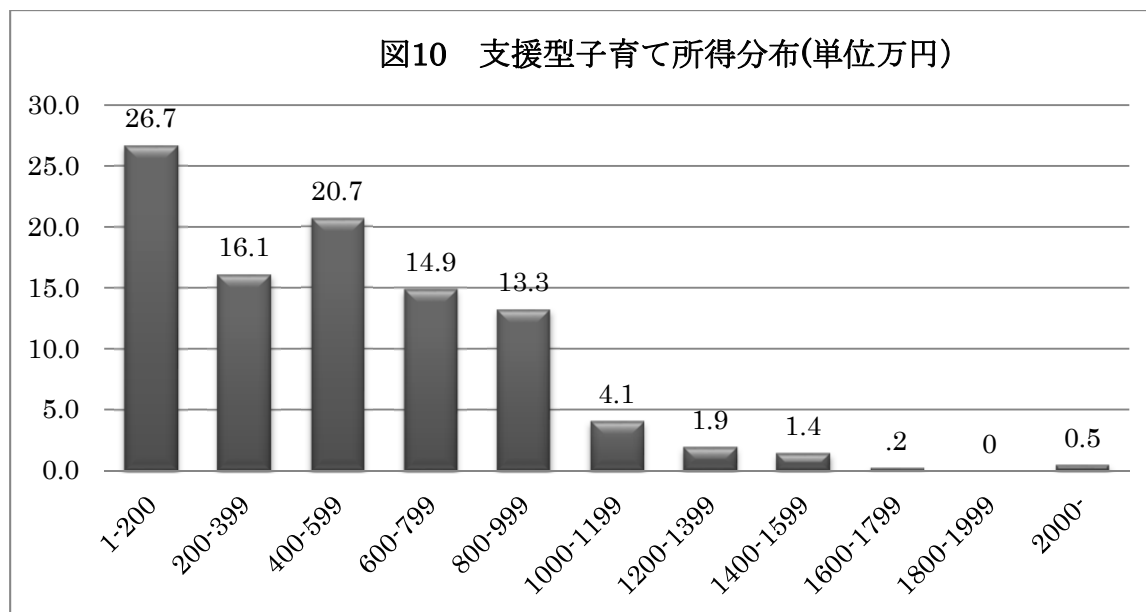
図8と図9の違いは、同じ親であっても、子供が男の子であるか女の子であるかによって、子育ての仕方が違ってくる可能性を示唆している。特に女性の場合、それぞれの受けた子育てを就業形態が正規か非正規かに分けて調べる必要があるだろう。これらは、サンプル数を十分大きく取り、よ

り詳細な調査をすることで明らかにしていくつもりである。

次に、それぞれの子育てのタイプ別に、所得分布を調べた。

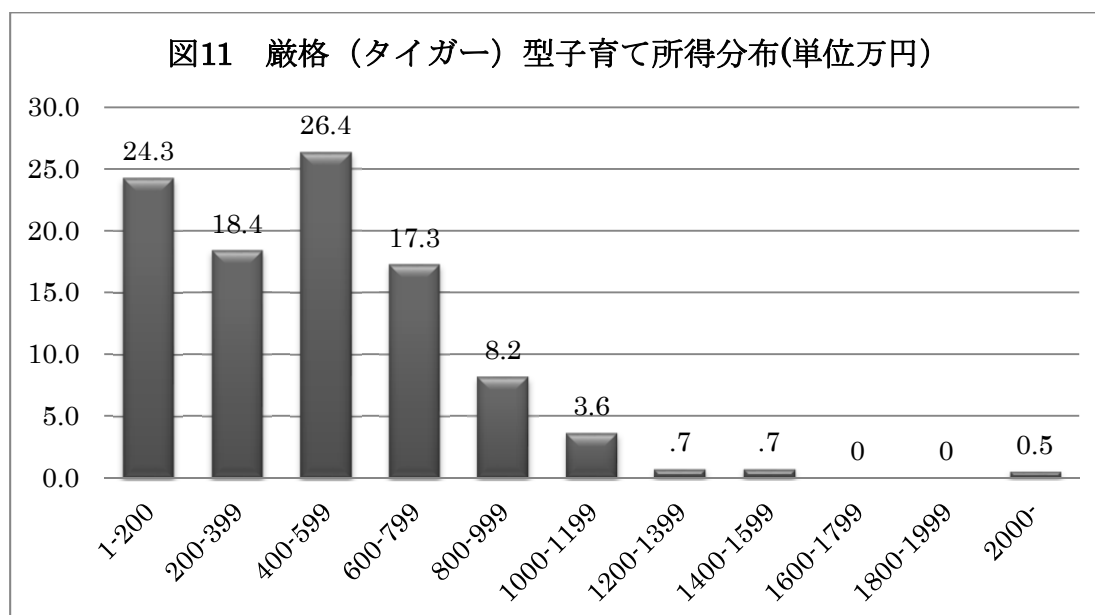
1) 支援型子育て所得分布

表14 支援型記述統計量					
	度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差
年収(単位万円)	415	100.0	2100.0	508.7	366.1



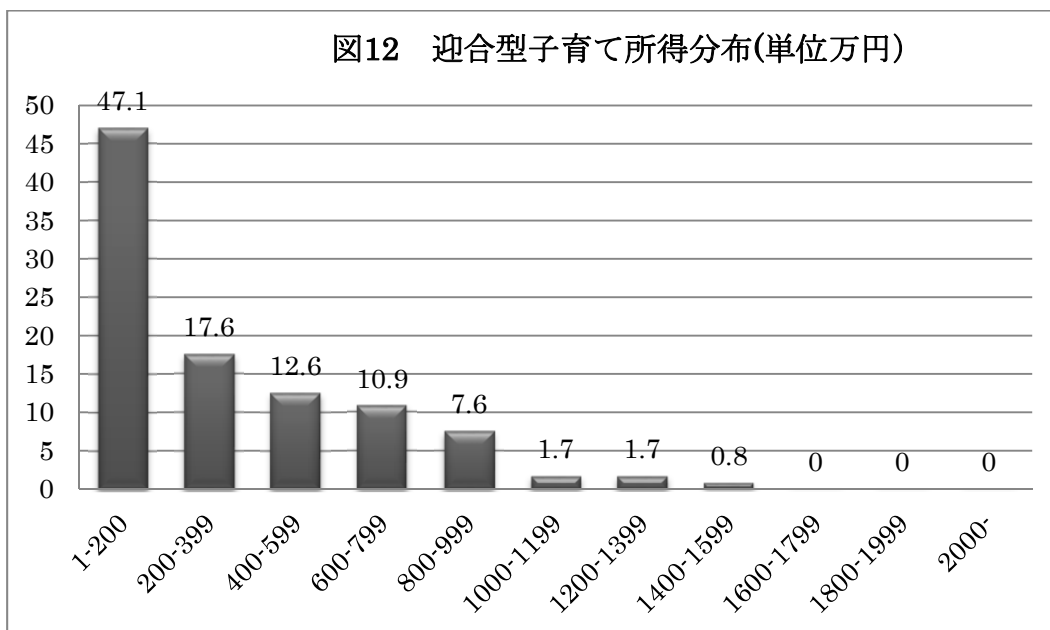
2) 厳格(タイガー)型子育て所得分布

表15 厳格(タイガー)型記述統計量					
	度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差
年収(単位万円)	440	100.0	2100.0	474.5	319.0



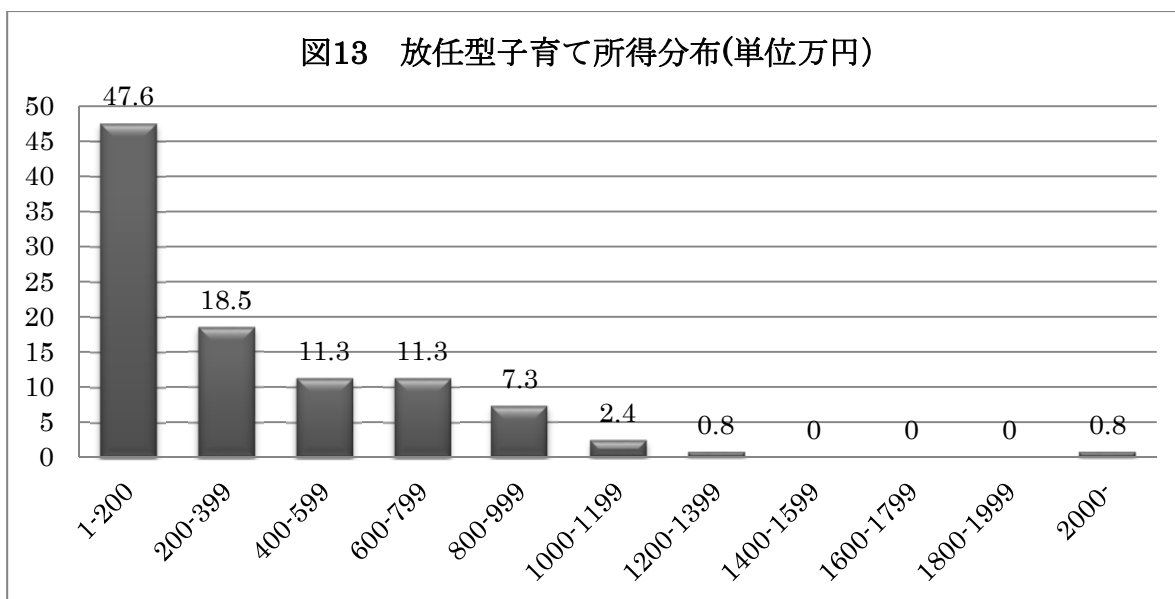
3) 迎合型子育て所得分布

	度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差
年収(単位万円)	119	100.00	1500.00	360.50	324.75



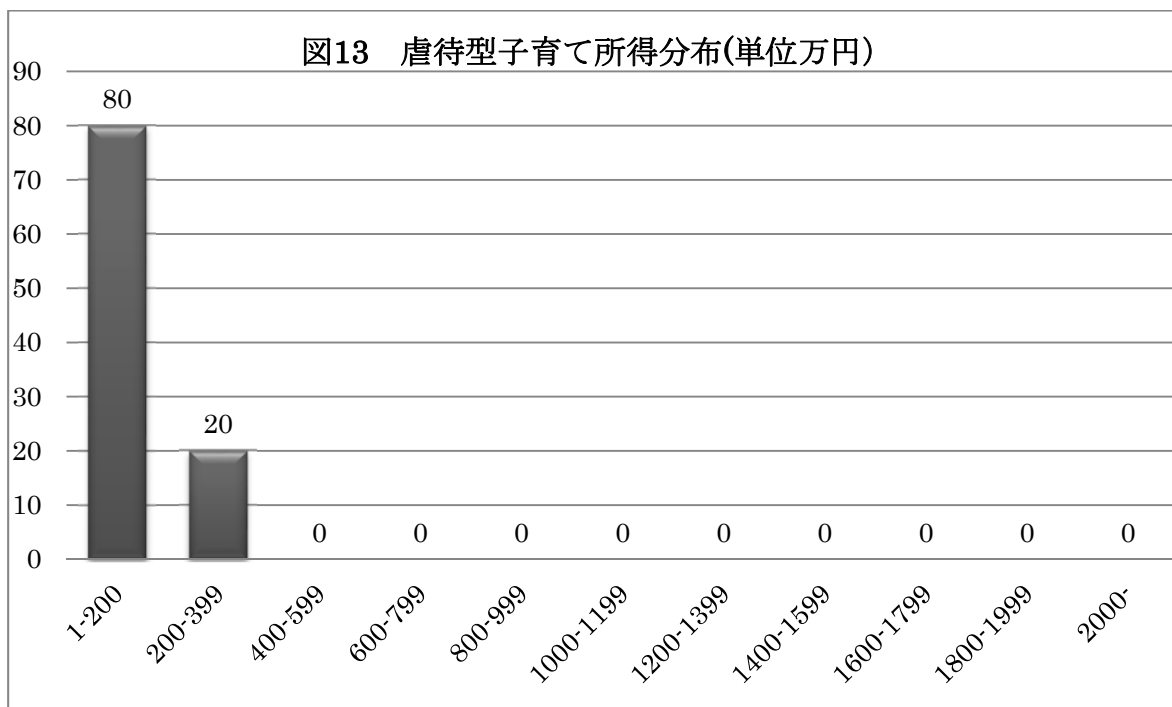
4) 放任型子育て所得分布

	度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差
年収(単位万円)	124	100.00	2100.00	358.06	339.08



5) 虐待型教育所得分布

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
年収(単位万円)	10	100.00	300.00	140.0000	84.32740



上記の分析により、支援型が最も長期的な子育ての成果が高く、厳格（タイガー）型は支援型よりも子育ての成果が低いことが示された。また、迎合型、放任型、虐待型は厳格型よりも子育ての成果が低いことが示された。

5. おわりに

我々は、自立教育の程度、愛情認知の程度、関心の程度をもとにして、それに、親の厳しさの指標を加えた上で、子育ての方法を、支援型、厳格型（タイガー）、迎合型、放任型、虐待型に分類し、それぞれの子育てを受けたグループの平均所得を比較した。5つの子育てタイプのなかでは、支援型の平均所得が最も高く、虐待型の平均所得が最も低かった。

なお、親の厳しさの程度だけで分類すると、叱られた経験がまったくないグループの所得が優位に低く、よく叱られたか、たまに叱られたか、ほとんど叱られなかったかで所得の差はほとんど見られない。ただし同時に、厳しく叱ることは教育効果がある場合とない場合との差も大きいことには注意すべきである。自立経験、愛情認知経験（共感）、関心経験のいずれかが高い場合は、よく叱られたグループの所得は顕著に高くなる。

参考文献

- Armsden C. Gay, & Mark T. Greenberg (1987), "The Inventory of Parent and Peer Attachment: Individual Differences and Their Relationship to Psychological Well-Being in Adolescence" *Journal of Youth and Adolescence*, vol.16, No. 5, 427-454
- Barber, K. Brian (1996), "Parental Psychological Control: Revisiting a Neglected Construct" *Child Development*, Vol. 67, No. 6, 3296-3319.
- Bird, Isabella L. (1880) *Unbeaten Tracks in Japan*,
- Chua, A. (2011), *Battle hymn of the tiger mother*, New York, NY: Penguin Press.
- Fuligni, V. T. J. Andrew and May L Source (1999), "Attitudes toward Family Obligations among American Adolescents with Asian, Latin American, and European Backgrounds" *Child Development*, Vol. 70, No. 4 (Jul. - Aug., 1999), 1030-1044.
- Kim, Su Yeong, Yijie Wang, Diana Orozco-Lapray, Yishan Shen, and Mohammed Murtuza (2013), "Does 'Tiger Parenting' Exist? Parenting Profiles of Chinese Americans and Adolescent Developmental Outcomes," *Asian American Journal of Psychology*, Vol. 4, No. 1, 7-18.
- Morse, E.S. (1885) *Japanese Homes and Their Surroundings*, Harper, New York
- Netto, C. A. and Wagener, G. *Japanischer Humor*; Brockhaus, Leipzig 1901
- Zak, P.J. (2012) *The Moral Molecule: The Source of Love and Prosperity*, Dutton Adult, New York
- 貝原益軒(1710)「和俗童子訓」
- 手島堵庵(1775)「我津衛」
- 西村和雄・平田純一・八木匡・浦坂純子 (2014)「基本的モラルと社会的成功」、『RIETI Discussion Paper Series』、RIETI独立行政法人経済産業研究所, (<http://www.rieti.go.jp/jp/>).
- 脇坂義堂 (1803)「撫育草」